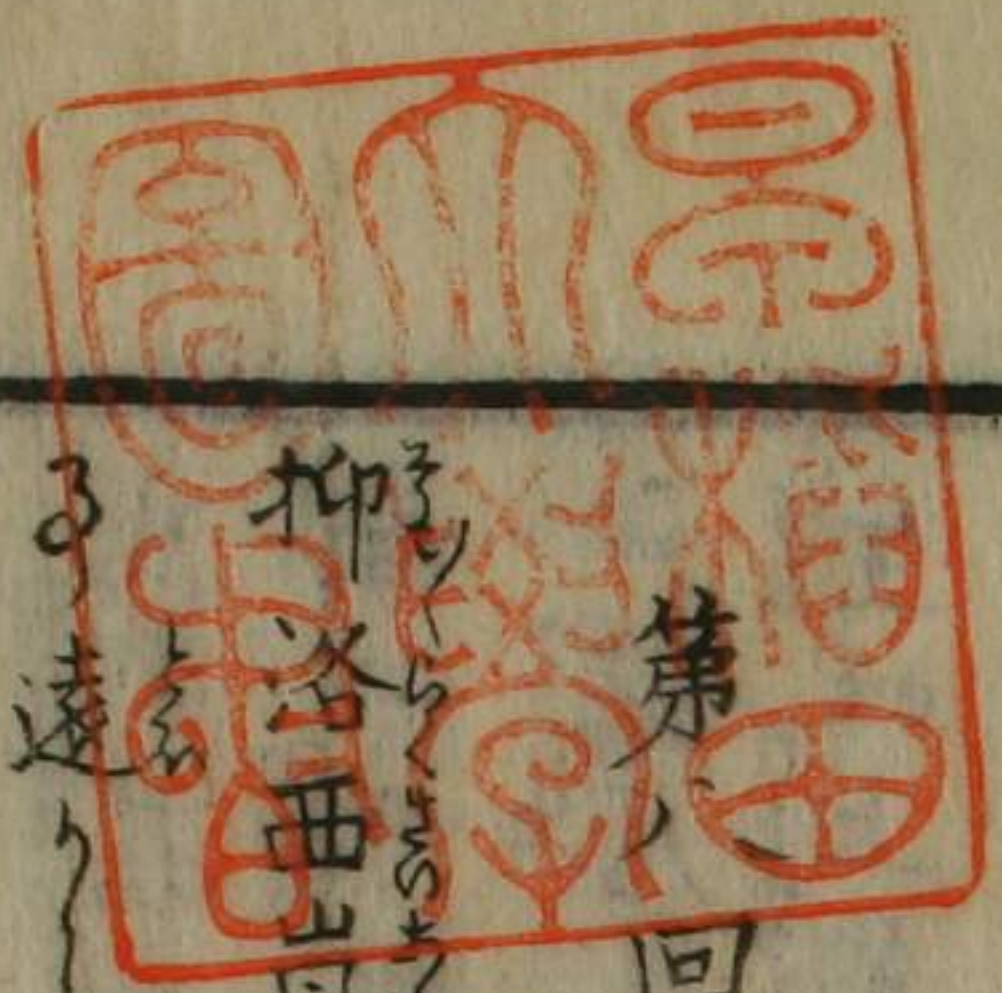




明遠 3
號 967
卷 8

本清



嵐峽花月奇譚卷之八〇

平安

瀬川恒成著

漚水の扁舟香雪と載せ

芳洲の鮎客落花と釣る

話



抑洛西山北山ハ高ク比まて低ク比。京師とよ
る。遠く比。而ふく遠く比似たり。松蔭あり梅
映あり。寺閣これより樵路これとやぐる。環すま
大堰の川々り。渡れば吐月の橋とゆり。
香雲楼七老亭。山より水よそひる。煙欄虚

七老亭

煙欄虚

其御合つおぎし艫ふつとちう切川の中流へおぐれ
出たり。されども川の真中へおぐれよりなる白砂は
堰まき。左右おぐればおぐれおぐれ舟自然と前面
ふる。川岸ちうく流まよる。音はおどろき清澄し。
吐嗟とちうり慌忙しく引あぐる釣の糸は
小石と縛まつけし扁舟の中へおげ入まつ。手繰寄
ま彼扁舟の難お、岸辺は着まらり清澄の舟は
上りまらり。前面の水閣よりまらりび陸する三人
お女打おどろきまらりまらり。正気と失しるもあり。

又肩息もあつてもいさ。遠く水を掬ぐ。三人がうた
そぐまおん。うんとつひり思次出たり。中は一が美
く。歴く年おと若き一人の娘猶も正気は後おれは。
腰は着る印。菴此菜取つ。口は入ま水を掬びる
吾口よ。ふくもて渠が口のへ。口は入ま水を掬びる
天命のう。竭ぐらや。吾は後まらり目とんひくも顔
つぐ。視まらり清澄大人は桜子。危りし
との。間も三人舟。起直まらり。清澄の艫と。岸
根の桜は。斬系を。おどろきまらり。舟の上まらり。寔は

清澄 不囚
桜子小 遇ふ



新刊 吉原 巻 八

三

今の光景は危きかぎりありけるよ。天命のついで
 難波のうねり藻屑とあつらんよ。吾まと此処は居
 合しき助け一人の豈料らんや。おん身等あつらん
 怪我とがむかや痛かむかや。うらむと問う
 三人齊しく言辞とそとへ寔るもおん身の宣
 危きと処ありしと。ふしき命

助うりし。是渾おん身くらげぞう。まろび落しよ
 一旦問絶しうれども。今の何ともあは
 幸ひ苦と重ねる。それ上へ落さゆ。傷つても足
 痛もふ。只狂心安堵し。頭はさきと覺るの
 その猶ふ喜ぶべし。夫はさきとあき此処へ。何ゆへ
 飯家と造り来り。ゆりしをいし不審と。いへを
 櫻子怨めしげよ。何ゆへといをいし侍らば。去歳の
 八月北野うねり。うねり後便もあく。思ひ煩らひ
 居るうらふ人の禪と聞たまき。親く不和る。其

中よ。おん身と奴家が北野より遭く話とおしつゝ
 落度とありき其場もさういふ大人の勘気と蒙り
 あり。行衛もしきにありありとさういふと
 弥まておのきを病と取結がき。遂は泉下は鬼と
 も。あしんとせしと是ある兩人が丹誠とけつし
 菅相公は願言し。ちやく奴家が病着の愈ゆる
 よ且のまておん身が行衛のまらち中。祈りて
 甲斐ありき。千度参詣の満願の日おん身の
 在処。嵐の山ふりどごと。氷人石も粗しなり。

其日よりし奴家が病氣も一日より愈ふれた
 猶恋しき止む。慈母は恩恵し。以川岸へ出
 養生せよとて飯家と造営ひる。賜りしゆ
 ちうに頃此処へ移りしうらまへ。公が菴とせし出
 ねが神の教も偽り有世あるを啣しよ。今日不
 図も掾端よりおん身が以川をくへ立出のふん
 るふよて。神の教の正しきと感歎し。嘯く。呼
 どさげと山川の岩せく水は音よまがれて。さ
 へぬつと悲しき小猶身とわれまき。端らる。出

三人手と抗て。招き呼つまゝ。拍子おもは川へ
 落つりと。思ひし後の夢心さうま正体ふりしよ。
 舟中ふりしと思儀なり。又斯むくり川をたひ
 りくろ水も早うろふ。左右むくのおづれ敢て。此方
 此ぎし。辺へおづれ近づき。公が助命と蒙るも。人力
 のおよむぬ処。是も北野の菅公の援けありしもの
 ありふし。町有がく。尊とく。禪るも。おづれ
 立ち。要時有る清澄ハ。斯まう。吾儕と恋慕ふ。
 志しの浅くぬ。身よりぬりく。忝し。づらおも互

此親くより。救し。あまにありねども。世活よ。所渭月
 村雲。花の嵐の故障あり。近ごろ。両家不和と
 あり。妹よ脊とつ。名のま。何れね。調子れつ。琴
 や。枕系も。塵つ。憂世は。美理どつと。哀し。命
 さふ。ゆるあ。又逢。こも有。べられ。心地。清く
 あり。あ。疾く。や。還。母公。孝養。あ
 多く。吾儕。が。勤気。と。蒙。只。汝。が。故。の。お。其
 縁。故。の。言。れ。も。大。推。と。あ。ね。家。尊。の。大。人。乃
 ち。思。慮。より。出。る。る。勘。當。と。い。ふ。表。の。名

のそあり。彼逆賊ども退治せり。邸も還りて主君に
 頼み更めて迎へ娶ん。先夫までい桜子いもの。うがひ
 りふ従ひねと。理せめり。流曉せり。一途は急る女心。
 又逢るもゆりんと。ころり。時の捨同。今の不和る
 中ありと。おん身と奴家が縁をさし。言まゝ。うら
 ぶさぞとよ。然まが奴家のおん身の婦あり。此処を
 添事叶まが。連て立のさ。あつさ。左あぐり。あ
 へい飯ら。取つさ。泣さ。げ。哀れと思へど
 清澄い。心よ。て叶。声。り。立。や。よ。さ。子。

さうけ。愚痴あり。猶幾歳もかくてあま。と。
 立。高思。君も親も捨る心。さ。不忠
 不孝ある人。吾侪が宿。妻。迎。り。得。
 叶。吾。三代。相思。主君。あり。又。年老。父
 母。れ。汝。一人。迷。是。捨。る。三人。一人。
 叶。左。汚。心。あ。て。貞女。吾。妹
 子。あ。ひ。こ。口。あ。れ。其。処。を
 さり。雨。吾。侪。退。ら。んと。顔。色。変。て。釣。竿。を

花月言言卷之八 十一 室文堂藏

さへ起去んとする光景は夫の短慮なり清澄大人。
 先待あへところの胡蝶阿哥が右左にたれとま
 をがり逼まば有繋ふりすて飯も得せん。爾らに
 只今吾言。言と聞け飯らさや。いふくくと
 焦燥は。桜子かふと中らさるく。よと泣つあま
 ちとやうぞ。焦をこぐれまをめぐと。此処まぐとぐも
 来しそのと。此ま逝ねと情愴ふ。女雛男雛も
 一年は一度は逢瀬ハ棚機も有しそのと。此中
 御負えむ。只一夜枕と交りるも。あしぬを

何の報ひぞや。今ハ却思ひけし。寧隔て恋こころ。
 逢ぬ昔ぞ増ありと。逢とせれば後心よくふま。昔
 いものと思ひざりり。よと一の哥よ人みよ。思
 いしものと今ハ。我身の上は有り。切ある
 想ひと口悦心は。こそ何いある。清澄を
 猶焦燥か。言ても。猶も慕は我
 此。悪魔障碍も同然ぞや。一人ま。此上
 難美とある。まねもの。とそ
 心つらぬ。浅す。袖ふり。起とす。

おりい借くる女気も。稍く弱く衰とくへつらまで
 ついて。別ま路の。憂い女れ愚痴おまが。傳言いひい
 赦免多へ。前の命又偽るふく。牛乳へ還る時節
 と俟ん。二世れ契了とかう。ひふ。変へぬいぞ。甬うても。
 名残おし。中又さう。涙おひせ。其折く。彼方の
 うとより一人れ。推者。年猶若く色白くて。清澄よ
 よく似る。碁盤島も。単衣大く破ま。処く。
 肌は。いと身ま。繩の中う。ある木綿帯。前
 う。荒栲の。浅黄染も。羊ぬぐひぬ。額の

汗とぬぐひつ。若且那。清澄と。其処に在せり。つらみの
 ぐく山ゆ。烟草火を借らんとて。出屋れ。よ
 このごまて。れ。留主守の机一脚。称子も。親氏も
 及へ。雨ま。雨戸と。さ。の。遠く。往せ
 一入長閑く。花もさ。り。と。あり。一。へ。篤実且那と
 へ。春め。花見の女中と。お。最中ら
 ころん。処へ。来ませ。と。清澄莞尔と。吾
 侪も。遅日。退屈と。魚つ。慰んと。城川。出

折る。京もく憐同土りり。屋敷に娘く花
見も来て。親も方より贈る。昏状とどけあがり
しゆへ。猶何くまこと都の咄し。思れも時刻をうめ
して。魚一尾も得釣がりき。秀や退らん。京師の人々
疾く還るも多へすと。心のこし。柴人と伴ひ菴へさら
くる。何とえ送るて。梅子の名残おし。とよあそと泣
と。懐め。汎む。侍女胡蝶。阿哥。原来丹波乃国。
保津の里に産まふれ。畧水心辨へ。とれ。舟は添ひ
く。水棹り。舟の頭と川向ひ。菴れ方へ押向つ。

逆ま。く水と横がりて。やどと前面の岸辺。よさ。よせ。
泣顔折し。梅子と。援けく。と。小舟より下り。仮家
よ。こ。この還る。川辺傳ひ。よ。秋月清英。大西が後
家操女。西人の鹿之進。言つけ。れ。役目の難免。
齊しく。邸と退出る。行衛の同。ト。嵐山。され。世同
の。同へ。と。ま。り。不和。ある。中。と。連立。清英の
先。よ。す。操女の。遙。後。ま。り。来る。道。も。久。こ。
空。よ。ま。き。ぬ。花。れ。雪。され。も。西人の。子。と。あ。り。よ。
心。れ。周。と。照。ら。れ。く。吐。月。の。橋。と。ら。わ。り。き。



桂大夫



清英我子の
生と死の
心と
苦し心

ふり顧る清英よ。此方此岸より大西操女。川を
隔て會釈しつ。秋月大人神苦勞と。声襖とりの
どり此良人此魂魄離るね行美清英も目礼し。
早くりー操女どの出ー処も来る処もかろくされ
ども昔よ変りて。不和おん身と我家親會とく
し。三年をくりりみ遺恨とく鮮るとけねり今
日此役目の落着次第より。ニツ一ツ此公命と。熟
く計らひめされよと。ソよ操の命は通す。執権の
公命。おん互よ子等の身の上。形産でも心は得し

ら。も青いさると死に。足下つら仕りや。そハ言
ひ。ままとく。蛇塚公此命の通す。首刎るより外
は術あり。不所存る子に有て益あり。無とてもま
事りけ。身の内の腫物の潰れが後此為あり。与夫の
怪しうねお覚悟あり。奴家の女は未練さ。小娘の愛
しき心り。日くげ此花よ。目しうけ。只今日乃
出の執権職。蛇塚どのが心とけ。まの娘が幸
假令娘の固辞も。母がまう。嫁入させん。恥
本望遂あり。一郡の主は奥が。多く此人を尊敬し

んと。思へばともしうれしく侍る。夕もこそあつた雨か
 ぐらやまも承引ぬ。夕承引ぬれば谷方もあし。
 枝風も久に梅木の切て継ねば大西の良人が家名没
 収せしまん。夕実の雨多。此方此郎児とく同し
 得心せんば身の出世栄花と咲りらり。目今
 折も此一條川へふがれが去りせ合図盛るぐ
 まあつた。吉左右と思つるべし。若花ちりちり枝む
 くり。流るるとれ郎児が絶命。夕此方ふし此一枝娘
 が命は活花とらさねや。計らいもせん。夕今

一時が送れ瀬ごし。夕此川一ツが生死の境。夕遺恨よ
 遺恨と重ゆる。夕積るうも山名。何じよ
 颯と散する。夕まがままで親と親辞とつぐ
 往道の彼方此方とかれも。変らぬもの恩愛の
 胸のさうりひ花くゆり。菴とさうりつそ行立派よ
 言の離して。定うふまきぬ子の心。覚束なくも呼子
 鳥娘と茶の門と。呼門声と接子の母さゆゆくを
 来ませし。出迎ふ行美と母親。今日の汝の顔色
 も美しうて安心し。侍女等氣とつけ。よき小頼

ひとさうけあく。うらま変らぬ母親のきげんは花乃
 梅子の椽さねの障子ひくせ。母公是る川向ひ
 花御覽口と進す。雨らぶとこの端ちう坐し
 見よ。花廻山やぐ阿哥が酌出。茶へ山吹
 の言ぬ色言で済と母公ハ呑乾。茶盆さしあ
 娘は對ひて梅子よ。春丈伸ら女兒と何まも膝
 下よ。あくの却は病れ種と。医者杏斎もつよよ。其
 方と嫁入。商量ふ。まじぐ。汝処す。来りあり。併
 心ふく。し。ぞ。眼入るもつ。う。ね。愛子の身の生涯

と任い。良人ふま。其方が心よ。深ぬ夫と。何と
 母が持い。其処。良人と定む。執権職蛇塚の
 あり。今の稍。家老も。恥す。本坊王遂。一部
 此主。其方の殿。北。さ。さ。ふ。れ。思ふら。ん。
 と。聞。娘。梅子。何。奇。胡。蝶。も。顔。ん。あ。い。せ。小
 腕立て。次へ。往。梅子の。稍。と。赤らむ。や。と。握。け。て
 母公。お。言。は。背。くの。恐。ま。多。れ。ぬ。奴。家。の。幼。稚。ら
 あり。も。清。澄。ぬ。と。妹。と。背。の。許。嫁。の。あ。れ。う。う
 ず。尊。さ。も。卑。も。姫。御。前。の。良。人。と。う。い。只。一。人。と。う。い

嫁道いふと。平常いふ人多し。雨すれぬ奴家
 が良人とす。秋月ぬより外はあ。ジャコ枕
 うらよよい。一旦約束せし。今も改め。然
 らぬ女は操とす。佐人は嫁よ。宣す。肯
 とら。怨む。母親も。娘が貞操も。耻ら
 ぬ。詞も。おろし。が。稍有。や。桜子
 沢と。さ。ね。この母。と。ひも。尤
 ろ。ひ。操と。中。破ら。ぬ。貞
 女。立。あ。中。折。持。来。ぬ。一。枝。と。く
 思案。判。し。ぬ。奴。花。八。重。一。重。互。不。和。親

く。心。そ。ろ。り。ぬ。ニ。ツ。花。一。ツ。枝。取。結。び。切。離。す。に。離
 されぬ。大。事。れ。脊。の。桂。太。郎。其。方。と。縁。さ。り。蛇。塚。ど
 の。降。参。す。れ。ぬ。死。る。命。と。助。る。の。さ。り。つ。ま。で。も。采。へ。久
 さ。答。の。花。左。も。あ。れ。ぬ。蛇。塚。ど。威。勢。か。け。し。よ。さ。さ
 ち。さ。れ。腕。と。さ。ね。び。ぬ。り。し。時。は。従。ひ。風。さ。ぬ。び
 と。蛇。塚。ど。の。へ。従。く。ハ。八。重。も。一。重。も。つ。が。多。く。送。り
 此。上。の。幸。い。さ。る。べ。し。愛。さ。り。し。桂。太。郎。助。る
 とも。殺。れ。し。其。方。は。返。事。一。ツ。も。雨。も。渠。も。美
 理。立。し。母。の。詞。と。さ。り。し。想。ふ。桂。太。良

も其身もどし小徒よ。答は花よりし。何とよのこ
 了。老木に梅をさくすくありて母の秋月より
 嘆とかくるら。斯ての却忠も孝も貞女は道もすも。
 とく。是等の美理と弁へ。よくさくさくけねやよ
 娘と。美理も情も弁へ。母は言辞は梅子も美理
 の柵くけしぬる。涙は上でさ上る。絆とさけら
 母公の目今此御教訓づてり。さしを侍らんや。今
 ら得心。さふら。夫は嬉しや。夫てこそ。吾子さ
 貞女ありと。背摩沙する母親よ。さう。對ひて梅子

千年も万年の。あり。良人よ。ひを離られ。松乃
 の操と変るし。孝と貞との二ツは。吾身一ツは。春
 んねむ。さふら。厭ねども。一旦定や。さう。春
 子に。赦免も。けね。我まふ。又他人を見へん。間夫
 一達も。同然。不美と。さふら。名への。ぐれ。が。さう。人。慈母公乃
 情愴。秋月ぬ。の。菴へ。連往。暇と。乞。さう。さう。
 べし。理。さう。娘の。辞。母も。殆。感。歎。し。く。流。石。
 夫の子。さう。り。女。道。も。世。美。理。も。斯。弁。へ。さう。
 女子。今。世。間。稀。さう。娘。さう。幸。さう。て。あ。や。さう。乃。

定り〜良人吾恋ふ人よいそりて生憎よ。おのりぬ人
よ思ひまゝ。悪逆不道に蛇塚へ嫁入せぬがぬとい
前世に報ひり借ります。月下翁の嫉りと。かき口流
り泣らる。気を取直し母親の嗟呼涙あつく。さ
ぬぬ娘が心い。いもかろし。さかざりふる。これさ
ふげぬ猶さうね。嘆き加はり病着れ。碍あつんと
目と押やぐひ娘よよくを気がつき。不和あつ
中の猶さうよ。義理を立ねばあぬとも。秋月父
子断ずも。商量しては他人よ。縁を組へ〜

あ〜。此方此心い。あ〜。富貴は迷ひる。約を
変へ。い〜。耻辱と与へ〜。弥々倍々憤激して。
遺恨は遺恨と重ね。更は和らくよ〜。あ〜人。
往く此方此心中と諦して。借其のらゝい免もろくも。
彼方此指揮は従がらん。今の免もろくも。あ〜
約束し〜。既にあ〜。あ〜。子よ。あ〜。あ〜。あ〜。
あ〜。い〜。い〜。い〜。い〜。い〜。い〜。い〜。い〜。
起ねと坐と立。さ〜。さ〜。さ〜。さ〜。さ〜。さ〜。さ〜。さ〜。
娘を援け起〜。み〜。み〜。み〜。み〜。み〜。み〜。み〜。み〜。

ふぐれー粉うめ黛直うまし。手てとたづさうんく飯家いを立たいで
吐と月の橋はしとらわらりき。清澄きよが侘住わの草菴くさを
さーて急いそぎめく

花月奇譚卷之八終

